

## スペイン語の EN 否定文における出現条件の一考察

田林 洋一

### 1. 序

本稿では Goldberg (1995) の構文文法 (Construction Grammar) によって、スペイン語の EN 否定の出現条件を提示する。従来の研究では、EN 否定は主題化やイディオムといった観点から議論されてきたが<sup>1</sup>、本稿では概念構造を用いて意味的な視野から分析する。本稿における「EN 否定」とは、以下の例文における否定表現を指す。

- (1) a. En toda la tarde agarró una rata.  
b. En tu vida has trabajado, Pedro. Bruyne (1999)

(1) では否定辞 (Palabras Negativas) が現れていないが、意味的に否定極性 (Polaridad Negativa) を持つ。本稿では特に明記しない限り、EN 否定を「EN を伴う前置詞句の存在による、否定辞を伴わない否定」と定義する。

### 2. 先行研究

本節では Bosque (1980)、Sánchez López (1999) 及び Bruyne (1999) を先行研究と位置づけ、諸々の問題点を指摘しながら EN 否定を概観する。

#### 2.1. Bosque (1980) による EN 否定の扱い

Bosque (1980: 29-64) は、EN 否定を主題化 (Tematización) 及び NEG-削除 (Elisión de NEG) の操作によって説明している<sup>2</sup>。

- (2) a. No vino nadie.  
b. Nadie vino. Bosque (1980: 29)

(2a) と (2b) は、後者が強調の意味を含意するという点では異なるが、真理値は等価である。

EN を含んだ否定表現に関して以下の文を参照。

- (3) a. Tal actitud no se puede tolerar en modo alguno.  
 b. No he estado aquí en mi / la vida.  
 c. No lo he visto en todo el día.

- (4) a. En modo alguno se puede tolerar tal actitud.  
 b. En mi / la vida he estado aquí.  
 c. En todo el día lo he visto.

Bosque (1980: 34)

(3) と (4) の意味的真理値は等価であり、それぞれパラレルな関係になる。Bosque は、(4) が否定極性を持つのは EN 前置詞句の移動、即ち主題化に因り、(4) において (3) のように否定辞が表層に現れないのは、NEG-削除に因ると説明している。これはチョムスキー付加 (Chomsky-adjunction) 及び NEG-削除によって以下のように定式化される。

(5)

*Tematización de TPN (T-TPN)*

X - NEG [V - Y - TPN - W] - Z

1    2    3    4    5    6    7

1    5 + 2    3    4     $\phi$     6    7

Bosque (1980: 34)

しかし、この定式で否定極性が必ず付加されるとは限らない。(6a) と (6b) はともに曖昧である。

- (6) a. En mi vida he sido vendedor de libros.  
 b. En toda la tarde has tenido tiempo de ir a la tienda.

Bosque (1980: 34)

(6a) と (6b) は肯定と否定の二通りの解釈が与えられる。Bosque はこの曖昧

性の根拠についてイントネーション以外の説明をしていない。

本稿では原則的に、EN 前置詞句の主題化及び NEG-削除によって、否定辞を含まない否定表現、即ち EN 否定が出現するという Bosque の主張を支持する。しかし Bosque の説明は、① EN 前置詞句を主題化すると何故否定極性が加わるのかといった理由付けを説明していない、② 統語論的側面のみを重視し、意味論的側面における分析が欠如している、③ NEG-削除が如何なる理由で成されるのかといった動機付けが明確ではない、④ 否定語の前置と主題化を混同している、などが欠点として挙げられよう。

## 2.2. Sánchez López (1999) による EN 否定の扱い

Sánchez López (1999) は、EN 否定を主に慣用句やイディオムの観点から説明する。

(7) En la vida adivinarás el acertijo. Sánchez López (1999: 2564)

Sánchez López は、(7) において En la vida という前置詞句が単独で命題に否定極性を与えると主張する。即ち、En la vida という複合語は完全に語彙化し、否定辞と同等の極性決定機能を持つとしている。更に、語彙化された EN を伴う前置詞句は否定辞と同等にふるまうとして、否定極性誘因子 (Inductores de Polaridad Negativa) と否定の呼応をすると説明する。

(8) Ana es la mejor persona que he conocido en mi vida.  
Sánchez López (1999: 2565)

Sánchez López によれば、否定極性誘因子である mejor が en mi vida と呼応し、(8) の従属節は否定極性を持つ<sup>3</sup>。

(8) は、Bosque の主題化による否定極性付与の反例として示唆的であり、語彙化の説明に妥当性を与えうる。だが、元来全く否定の要素を持ち得ない EN 前置詞句を語彙化された否定表現と位置づけ、tampoco、nadie、sin といった単独で否定極性を与えうる否定辞と同等に扱う主張には無理がある。EN 否定が全て EN を伴う前置詞句の語彙化に因るならば、en la vida、en mi vida、en tu vida、en toda la tarde といったほぼ無数の EN を伴う前置詞句ごとに語彙化の説明を与えねばならない。また、EN 前置詞句を持ちながら、肯定的に

しか解釈されえない (9) のような現象を説明できない。

(9) En tu vida has trabajado mucho.

(9) は、EN 前置詞句を主題化しながらも否定極性を持たないという点で *Bosque* の反例になりうるし、また、EN 前置詞句が現れながらも肯定的な読みしかできないという点で *Sánchez López* の語彙化の反例になりうる。更に、何故 (10) のような基本的な EN 前置詞句が否定極性を持たないのか、即ち、どういった EN 前置詞句が EN 否定を引き起こす要素として語彙化されているかを説明できない。

(10) a. Comeré la cena en una fábrica.

b. Vivo en una casita.

c. Tienes que prepararlo en cinco minutos.

(10a) は動的な動詞を伴う空間表現、(10b) は静的な動詞を伴う空間表現<sup>4</sup>、(10c) は空間表現を時間表現にメタファー的に拡張した表現<sup>5</sup>であるが、いずれも肯定的解釈しか持たない<sup>6</sup>。これに対する *Sánchez López* の反論として、EN 否定は三つの特性を持っていると主張する。第一点は、EN 否定が生じるのは前置詞 *hasta* の出現環境がそうであるように、点的な述語に制限されているということである。

(11) \*En toda la tarde estaba estudiando. *Sánchez López* (1999: 2604)

(11) は継続的な述語が出現しているため、EN 否定の出現を許さず、結果肯定解釈しかなされえない。二点目は、EN 否定が生じるのは EN 前置詞句のみに限られるということ、そして最後の特性は、前置詞 EN に後続する名詞句が普遍的に量化されなければならないということである。

(12) ??En veintitrés minutos fue capaz de decir nada coherente.

*Sánchez López* (1999: 2604)

(12) は EN に後続する表現が量化されていないため、EN 否定ではない。し

かし、これらの条件付けは記述的なものであり、かつ具体的な定義がない。

### 2.3. Bruyne (1999) による EN 否定の扱い

Bruyne (1999) は、EN 否定現象を以下のように説明する。

- (13) Una combinación del tipo < en (+ todo) + sustantivo que indica un lapso de tiempo (año, día, mañana, noche, vida...) > siempre indica negación. Bruyne (1999: 671)

Bruyne は続けて、これら EN 前置詞句は動詞の前に置かれる傾向にあり、前置された時は他の否定語が前置することなく否定極性が現れると主張する。しかし、この論は (6) のように常に否定を表現するわけではなく極性が曖昧な例、(8) のように EN 前置詞句が動詞の後に来ても否定を表す例、また、(9) のように EN 前置詞句が動詞の前に来ながら肯定的解釈を得られる例というように諸々の反証が可能である。

更に、EN 否定が起こるのは常に時間の経過を指し示す (sustantivo que indica un lapso de tiempo) 表現だけではない。以下を参照。

- (14) En todo el país se ha visto una criatura más perversa.

Bruyne (1999: 672)

修正案として、Tabayashi (2003) は、前置詞 EN はプロトタイプ命題の交替により否定極性を潜在的に持ちうると主張する。

- (15) La preposición EN percibida como una Gestalt puede tener potencialmente la propiedad NEG por el cambio de la proposición prototípica. Tabayashi (2003: 79)

ゲシュタルト知覚された前置詞 EN が否定素性を潜在的に持ちうるという (15) の意見を支える言語表現として、田林 (2003) は以下の例を挙げる。

- (16) a. ¿Hoy mataste el tiempo durante el trabajo? – En absoluto.  
b. ¿Hoy mataste el tiempo durante el trabajo? – Absolutamente.

田林 (2003 : 56)

(16b) が肯定的に解釈される (仕事をさぼった) のに対し、(16a) で否定的な解釈 (仕事をさぼっていない) がされるのは EN が否定要素を潜在的に持ちうるからと説明される。

(17) a. En tu vida has trabajado mucho. (= (9))

b. En tu vida has trabajado.

田林 (2003: 52)

Tabayashi は (14b) が否定的に解釈されるのは、主題化や EN 前置詞句の性質ではなくコンテキストに由来すると説明する。しかし、コンテキストの定義自体が言及されておらずブラックボックス的な扱いを受けているため、文脈がどこまで極性に影響を与えうるか、定式化されていない。更に、プロトタイプ命題に否定極性がかけられるのは統語レベルか語彙レベルか等は議論すべき課題である<sup>7</sup>。

更なる先行研究としては、出口 (1995a: 218, 1995b: 551) が EN の特殊な用法ではなく「否定語なしに単独で否定の意味を表せる」表現として以下の文を挙げている。

(18) En mi vida he oído algo tan absurdo.

出口 (1995a: 218)

続けて、en mi vida は nunca と同等の価値を持つと説明するが、出口は単なる事実の提示のみに留まっているだけで、EN 否定の発生条件や記述的な説明を行っていない。

以上のように、EN 否定についての先行研究は非常に末梢的か全く触れられていないことが多かった。EN 否定を初めて体系化して説明した Bosque 以後も、本質的には変わっていない。EN 否定に関しては、社会的背景、地理的背景、文化的背景なども含め、研究すべき対象は多岐に渡るが、次節以降では、主に EN 否定の形式的側面の分析を試みたい。

### 3. 本論

前節では EN 否定の先行研究には諸々の問題点があることを見た。本節では EN 否定が現れうる条件を提案する。

### 3.1. EN 否定における統語的条件

本節では EN 否定が現れうる統語的条件を以下のように提案する。

#### (19) EN 否定における統語的条件 (Condiciones Sintácticas de la Negación con EN)

- i) 動詞の意味を修飾する選択的前置詞句または副詞句があってはならない。
- ii) 原則として EN は広範な範囲を指し示す名詞句（主に時間表現）、またはある特定の広範ないしは全体を指し示す全称的な名詞句と結合しなければならない。
- iii) EN 前置詞句は主題化されなければならない。

i) は筆者の観察である。ii) は EN の後に続く名詞句は、先行研究では時間表現が基本とされていた。しかし本稿では EN の後に続く名詞句は時間表現が条件ではなく、広範な範囲を表現することが条件であると主張する。iii) は Bosque に準拠する。(19) の妥当性について、以下を参照。

(20) En tu vida has trabajado. (= (17b))

(21) a. En tu vida has trabajado mucho. (= (9))

b. En una fábrica has trabajado.

c. Has trabajado en tu vida.

(20) は否定解釈、(21) は肯定解釈がなされる文である。まず、(20) は (19) を全て満たすため、否定解釈がなされる。(21a) は選択的な副詞 mucho が動詞 has trabajado を意味的に修飾しているため、(19i) に違反し、否定解釈はなされない。以下の文も (19i) に抵触するため、同様に否定解釈はなされない。

(22) En mi vida poco a poco he comprendido lo que me dijo mi padre.

(22) では、選択的副詞句 poco a poco が動詞 he comprendido の意味を修飾していることにより、肯定解釈しか許さない。

(21b) は (19i) 及び (19iii) は満たすが、(19ii) の条件に抵触するため、否定解釈はなされない。同様に (21c) は (19i) 及び (19ii) は満たすが、(19iii) の条

件に抵触し、否定解釈は不可能である。

更に、(19ii) が時間表現を重視するのではなく、広範な範囲表現を重視するのは、EN 前置詞句が空間表現である *En todo el país se ha visto una criatura más perversa.* が否定解釈しかなされず、逆に EN 前置詞句が時間表現になっている *En un instante se ha visto una criatura más perversa.* は肯定解釈しか許さないからである。

(4b) に現れる *aquí* は近称の指示副詞だが、この指示副詞は動詞 *he estado* が義務的に要求する。従って、動詞から与えられる参加者役割とみなされるため (19i) には抵触せず、否定解釈が可能である<sup>8</sup>。

(19) が正しいとすれば、(6) の極性解釈が曖昧な点は以下のように説明できる。

まず、(6a) において名詞句内の *de libros* は選択的であり、*de libros* がなくとも適格である (*En mi vida he sido vendedor.*)。つまり、義務的に出現した名詞句や副詞句 (即ち動詞が要求する項) の内部に選択的な前置詞句があると極性が曖昧になる。これは、(19i) を「概念構造内では」厳密に守っていないために生じている曖昧性と思われる。即ち、(6a) における *de libros* は「統語的には」義務的に出現した名詞句を修飾している選択的前置詞句と判断されるが、統語構造だけでなく言語の線状性及び視覚的な語順も言語認知に影響を与えているため、結果として極性の揺らぎという概念構造での曖昧性をもたらしていると考えられる。これは、選択的前置詞句が動詞を修飾するような *En mi vida he sido vendedor de nuevo.* が (19i) に抵触し否定解釈を持ちえないことから裏付けられる。(6b) の曖昧性も同様の理由による。

(8) の従属節における極性の曖昧性は、そもそも (19iii) に違反しながら、否定極性誘因子 (*mejor*) が出現していることが原因と考えられる。

以上、統語的知見から EN 否定の条件を提示した<sup>9</sup>。次節では (19i) に的を絞り、概念構造の点から何故 (19i) が EN 否定条件となっているのかを考察する。

#### 4. EN 否定における項構造

本節では EN 否定における概念構造を Goldberg の主張する構文文法で説明する。4.1 で構文文法を概観し、4.2 で構文文法を概念意味論的に図式化する。新しい試みとして、4.3 で EN 否定における概念構造を分析し、4.4 では構文理論によって更なる説明を図る。

#### 4.1. Goldberg による構文文法

構文文法とは、ある特定の意味と形式からなる構文の存在を容認する考え方で、Fillmore (1982) や Lakoff (1987) のフレーム意味論 (Frame Semantics) で既にその存在は指摘されている。構文理論の根底を支えるのは、「中心的構文の中の非中心的構文」の存在、中心的構文と非中心的構文の「動機付けの関係」や、「特定の意味と形式から成る構文」の存在である<sup>10</sup>。それをより体系化したのが Goldberg である。

構文理論における主張はおおまかに言って、① 構文は特定の意味と形式からなり言語の基本的単位をなす、② 格文法によって説明される文法構造だけでなく、構文は全ての構造をも包括する、③ 語彙と統語も共に形式と意味が対になっており、その点で両者は厳密な区別が出来ない<sup>11</sup>、④ 語用論的要因を考慮に入れる必要がある、と説明されよう。Goldberg の大きな功績の一つは、以上の主張に加え心理学的要因も積極的に取り入れたことで、意味役割と項の不一致を解決したことにある。意味役割と項の不一致の現象は二重目的語構文などが代表的であるが、本稿では使役移動構文に的を絞って概観する。使役移動構文とは、以下のような文である。

(23) Pat sneezed the foam off the cappuccino.

大堀 (2002)

(23) では動作主の意味役割を持つ Pat が主題の意味役割を持つ foam に使役的に働きかけ、前置詞句で示された経路を辿る運動を引き起こす。しかし、動詞 sneeze は一項を与える自動詞であり、foam 及び cappuccino には動詞から項が与えられない。構文理論では、これらは動詞からではなく構文から項を与えられ、それぞれの意味役割を担うとする立場を取る。つまり、(23) の項構造は動詞 sneeze の語彙項目によってもたらされたものではなく、使役移動構文の存在によってもたらされたものである。使役移動構文もプロトタイプ的な表現とそうでないものがあり、具体的移動から抽象的移動にまでメタファー的に拡張できる (e.g. John allowed Mary out of the room.)。

フレーム意味論では、動詞 sneeze が表す行為が「カプチーノから泡を飛ばす」という運動を使役的に引き起こしうるという知識を人が持っているとして説明する。生成語彙論では、語彙項目の段階で既に動詞 sneeze には使役的な移動を引き起こしうるという情報があると仮定する。しかし、生成語彙論では動詞に付与される情報があまりに多すぎることで、フレーム意味論では語用論

的及び心理的な要素が過大評価されていることから、構文理論における説明が最も妥当であると思われる。

(23) における格付与は、統語レベルでは cappuccino は前置詞 off から斜格を、Pat は動詞 sneeze から主格を付与されるが、foam は構文から目的格を付与されているとしか説明できない。生成語彙論では動詞 sneeze の情報が一定でないため格付与が限定できない。

(24) \*Pat sneezed the foam.

大堀 (2002)

(24) の非文法性は、動詞 sneeze は foam に格を付与しないと説明できるが、この説明を推し進めると生成語彙論では (23) の文法性を説明できない。場合ごとに理想的な認知モデルを構築するフレーム意味論では、全てを語用論的解釈に推し進めてしまうために具体的な格の供出先を特定できない。従って、(23) における foam の統語的抽象格は、構文から与えられたと考えられうる。

Goldberg は、個々の動詞が項に対して課す意味指定を参加者役割 (Participant Role)、構文文法が項に対して課す意味指定を項役割 (Argument Role) と呼んで区別している。参加者役割は個々の動詞毎の意味の違いに対応する細かい意味情報を持つが、項役割は構文知識に根ざしているため、より一般的であり細かい意味情報は指定されていない。(23) において、Pat は動詞 sneeze から項を得ているので参加者役割、foam 及び cappuccino は構文知識使役移動構文から項を得ているので項役割と規定できる。(25) は、(23) の構文を図式化したものである。

(25) Caused-Motion Construction

Sem CAUSE-MOVE <cause goal theme>

R: means, PRED < >

Syn V SUBJ OBL OBJ

Goldberg (1995: 52 一部改)

構文理論では、基底構造の上に構文知識が成り立っていることを前提とした上で、項の不一致を構文文法によって解決している<sup>12</sup>。

#### 4.2. 使役移動構文の語彙概念表示

前節では、一項動詞とみなされる動詞 sneeze でも経路表現においては三項現れうる（即ち三項動詞になり、二項しか与え得ない (24) は非文になる）現象を観察した。本稿では Goldberg の構文文法を影山 (1996) の概念構造標識に従って説明する。以下の文を参照。

(26) The general marched the soldiers to the tent.

Levin & Rappaport (1995: 111)

(26) は本来一項動詞であるはずの march が二項を伴い使役的表現として具現化する例<sup>13</sup>である。このように経路表現を伴わずとも使役の意味を持ち、一項動詞が二項を伴う例が (27) である<sup>14</sup>。

(27) He walks his dog every morning.

影山 (1996: 175)

これら一項動詞が二項ないしは三項を与える動詞の意味構造は、以下のよう表されうる<sup>15</sup>。

(28) V: [ xi ACT ] CONTROL [ xi MOVE [Path ]]

V

影山 (1996: 174 一部改)

(23)、(26) 及び (27) で共通するのは使役の意味の存在であり、影山は CONTROL という新たな基本的意味成分を導入して使役移動構文を説明する。従って、(28) は (25) における Goldberg の構文文法表示を語彙概念標識で表したものといえよう。(25) と (28) の違いは以下のとおりである。

- < 1 > 前者が一般的使役移動構文を表しているのに対し後者は自動詞における他動詞的用法に限定した使役移動構文を表していること。
- < 2 > 前者は使役の表示に CAUSE を立てているのに対し、後者は使役の表示に意図性のある CONTROL を立てていること。
- < 3 > 前者が項構造における統語的な表示をしているのに対し、後者はあくまで概念構造のみを表示していること。

以上、Goldberg 及び影山の主張を簡単に概説した。以下、EN 否定の概念構造に言及する。

#### 4.3. EN 否定における概念構造

EN 否定における概念構造を概観する上で、(20) を例に挙げる。(20) の概念構造は (29) である<sup>16</sup>。

(29) [+Tem: EN TU VIDA ] *i* [HA SIDO EL CASO [POL [TU TRABAJAR ]]] [+NEG trace*i* ]

(29) で主題化された EN 前置詞句は、主題化される前の位置に痕跡 (trace) を残す。この痕跡は構文から与えられた項構造の空の項であり、Jackendoff (1990) が述べる統語構造では表出されない暗黙項 (Implicit Argument) にほぼ相当する<sup>17</sup>。本稿では、(19ii) の要件を備えている EN 前置詞句が主題化され、その痕跡が空である場合、この痕跡は否定極性を与えうると仮定する。しかし、この痕跡の位置に何らかの意味的因子が入り込んできた場合、痕跡は否定極性としての価値を失い、入り込んできた因子の意味的性質に従う。(9) の概念構造である (30) はその典型である。

(30) [+Tem: EN TU VIDA ] [HA SIDO EL CASO [POL [TU TRABAJAR ]]] [MUCHO]

EN 前置詞句の主題化によって生じた痕跡の否定極性は、副詞的意味成分 MUCHO の参入によって消される。結果として否定極性は消え、肯定的な解釈しか容認されなくなる。

前節 (3.1) において (6) の曖昧性を指摘したが、それは (6) において動詞に後続する名詞句を修飾している選択的前置詞句が、概念構造では二通りの解釈を与えうるからであろう。(6a) における肯定解釈の概念構造は (31a)、否定解釈の概念構造は (31b) である。

(31) a. [+Tem: EN MI VIDA ] *i* [HA SIDO EL CASO [POL [YO SER VENDEDOR [DE LIBROS]]]] [trace*i* ]

b. [+Tem: EN MI VIDA ] *i* [HA SIDO EL CASO [POL [YO SER

## VENDEDOR [DE LIBROS]]]] [+NEG tracei ]

聞き手は (6a) の線状的語順から (31) の両方の概念構造を想定しうる。(31a) の EN MI VIDA は単に *durante el período de mi vida* の意味が強調されているに過ぎない。従って、(6a) は否定解釈も肯定解釈も容認する。

EN 否定は概念構造で与えられたものであるが、項構造では動詞が意味的に要求する意味役割を入れるスロットを問題にするため、この痕跡は項構造では扱われえない。否定極性にかかわる EN 前置詞句はあくまで選択的な前置詞句であり、義務的ではないからである<sup>18</sup>。

### (32) Has trabajado.

(32) は EN 前置詞句がないにもかかわらず容認される。この選択的前置詞句と義務的前置詞句の区別はきわめて重要である。前者は動詞の項構造に直接影響を与えないが、後者は項構造と密接に関連する。両者の区別立ては、特にスペイン語では同一の動詞内でもしばしば必要となる。例えば、動詞 *trabajar* は (32) のような自動詞的用法と同様に他動詞的用法も容認する<sup>19</sup>。

### (33) Has trabajado la madera.

(33) で現れる目的語 *la madera* は動詞の項構造から義務的に要求されるため、概念構造において選択的に現れる EN 前置詞句と本質的な項構造関係はない。

他動詞による言語表現にも EN 否定が現れうるのは (1a) で見たとおりであるが、(1a) における *agarró* は動詞の項構造において目的語が要求されるため、その義務的目的語である *una rata* が EN 前置詞句の主題化によって残された痕跡に入り込むことはない。即ち (1a) の概念構造は (34) になる。

### (34) [+ Tem: EN TODA LA TARDE] i [FUE EL CASO [POL [AGARRAR UNA RATA]]] [+NEG tracei]

基本的に広範な範囲を指し示す EN 前置詞句は、動詞がその項を要求する性質のものではない。即ち、EN 否定に直接かかわるのは参加者役割ではない。

従って、動詞の項構造が要求する項と選択的な項を厳密に区別することが必要となる。以上の議論から、以下の仮説を立てることができる。

(35) EN 否定における意味論的条件仮説 (Hipótesis de Condiciones Semánticas de la Negación con EN)

- i) 広範な範囲（主に時間表現）を指し示す選択的 EN 前置詞句が主題化された時、意味論的痕跡は否定極性を持ちうる。
- ii) 痕跡は動詞の項構造と関係がなく、痕跡には動詞が要求する参加者役割を入れることはできない。
- iii) 痕跡に選択的前置詞句または副詞句が入ると、否定極性は失われる。

ここで重要なのは、EN 否定は動詞の項構造と直接的な関連はなく、構文文法における項構造と密接に関連する点である。次節では、参加者役割ではなく項役割の観点から説明を与えうる可能性を模索する。

4.4. 構文文法における EN 否定

以上を踏まえた上で、(35i) 及び (35iii) を検討する<sup>20</sup>。なお、(35ii) は、動詞から与えられる参加者役割ではなく構文文法から与えられる項役割に焦点を絞っているという点で、以下の説明の前提となっている。

構文文法を扱う上で重要なのは、①複合表現の意味は、それを表現する記号表現の意味の総和であるとする構成性の原理 (Principle of Compositionality) が当てはまらない場合に適用される、②中心的構文から周辺の構文が成立されなければならない、という点であろう。①は「全体は部分の総和以上のものである」とするゲシュタルト的な汎用性<sup>21</sup>、②は構文文法を安易に解決不可能な構文の説明材料にしないための抑制をそれぞれ含意する。

EN 否定の構文は [SN V SP] を基盤とし、以下のように表される。

(36) Composite structure: Negation of EN

Sem	location <sup>22</sup>			< agent <u>+NEG</u> >
R: means,		PRED		
Syn	+Tem LOC <sub>i</sub>	V	SUBJ	trace <sub>i</sub>

下線で示した場所が EN 否定構文がもたらす構文的意味であり、太字は構文によってプロファイルされた要素である。否定極性 (+NEG) は語の意味の総和に還元されないので、構文から与えられた意味と考えられうる。もともと選択的な EN 前置詞句は、EN 否定を表す際は構文によって義務的に要求される。従って、EN 否定における EN 前置詞句は動詞の項構造ではなく構文の項構造で語られる項役割であり、構文によって EN 前置詞句はプロファイルされる。以下、(17b) を (36) のプロトタイプを使って表す。

(37) Composite structure: Negation of EN

Sem	location				< agent <u>+NEG</u> >
R: means,		TRABAJAR			
Syn	+Tem	LOCi	V	SUBJ	tracei
	En tu vida	has trabajado	pro		

スペイン語は主語を省略できる pro 言語であるため、統語構造で *tú* は具現化されない(Chomsky (1981) に従い、便宜上 pro と表記する)。

(36) の構文はいわば中心的な構文であり、(4a) のように広範な範囲の表現を伴わない言語表現、あるいは (8) のように主題化を伴わない周辺的な言語表現へと、構文内でのメタファー的拡張が可能である。従って EN 否定構文は構文内のネットワークを形成することができる。

以上、EN 否定を構文とみなすために必要な要件①と②が共に成立することから、(36) は構文として適格と考えられる。

## 5. 結語

本稿では EN 否定が Goldberg の構文文法によってある程度解決されることをみた。本稿の意義として、① EN 否定における統語的条件を立てたこと、②それに伴い、EN 否定における概念構造に制約を立てる提案をしたこと、③意味論的条件の妥当性を構文文法によって説明付けたこと、と要約される。

## 6. 今後の課題

検討すべき今後の課題として、① EN 否定における格のあり方を明確にすること、② EN 否定における構文間のネットワークを詳細に分析すること、特に否定語の動詞の前置、否定語の移動 (Transporte de la Negación) 等の構文

に拡張しうる可能性を模索すること、③構文の項構造によって与えられる意味役割を明らかにすること、等が挙げられよう。特に意味役割と項構造は密接な関係を持つため、意味役割を枠外に置きながら項構造を議論することは非常に危険を孕む。今後は意味役割を絡めた EN 否定における項構造の研究が急務である。

#### 参考文献

- Alarcos Llorach, E. *Estudios de gramática funcional del español*, 3ª ed., Madrid. Gredos. 1980.
- Bosque, I. *Sobre la negación*. Madrid. CATEDRA. 1980.
- Bruyne de, J. “Las preposiciones.” en Bosque, I y Demonte, V. (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española*. Vol. I. 657-703. Madrid. ESPASA. 1999.
- Chomsky, N. *Lectures on Government and Binding*. Berlin. Mouton de Gruyter. 1981.
- 出口厚実「不定語,否定語」山田善郎監修『中級スペイン文法』209-219. 東京. 白水社. 1995a.
- 出口厚実「表現 15 : 否定」山田善郎監修『中級スペイン文法』547-555. 東京. 白水社. 1995b.
- Fillmore, C. “Frame Semantics.” in the Linguistic Society of Korea. (eds.) *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul. Hanshin. 111-138. 1982.
- Goldberg, A. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago. University of Chicago Press. 1995.
- Jackendoff, R. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge. MIT Press. 1972.
- *Semantic Structures*. Cambridge. MIT Press. 1990.
- Jespersen, O. *A Modern English Grammar III*. George Allen & Unwin Ltd. London & Ejnar Munksgaard. 1928.
- 加賀信弘「数量詞と部分否定」『指示と照応と否定』東京. 研究社出版. 1997.
- 影山太郎『動詞意味論—言語と認知の接点』東京. くろしお出版. 1996.
- 「非対格構造の他動詞」『文法理論：レキシコンと統語』シリーズ言語科学 1. 東京. 東京大学出版会. 2002.
- Lakoff, G & Johnson, M. *Metaphors We Live By*. Chicago. University of Chicago Press. 1980.
- Lakoff, G. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago. University of Chicago Press. 1987.
- Levin, B & Rapoport, T. “Lexical Subordination.” *CLS*, 24. 1. 275-289. 1988.
- Levin, B & Rappaport Hovav. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics*

*Interface*. Cambridge. MIT Press. 1995.

松本曜「使役移動構文における意味的制約」『認知言語学 I : 事象構造』シリーズ言語科学 2. 東京. 東京大学出版会. 2002.

中右実「認知意味論の原理」東京. 大修館書店. 1994.

西村義樹「換喩と文法表現」『認知言語学 I : 事象構造』シリーズ言語科学 2. 東京. 東京大学出版会. 2002.

大堀壽夫「認知言語学」東京. 東京大学出版会. 2002.

太田朗「否定の意味-意味論序説」東京. 大修館書店. 1980.

Sánchez López, C. “La negación.” en Bosque, I y Demonte, V. (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española*. Vol. II. 2561-2634. Madrid. ESPASA. 1999.

Tabayashi, Y. *Aplicación de la semántica jerárquica y la teoría de prototipo en la preposición EN – Con especial atención a la polaridad de EN*. M.A. Tesis. Tokyo. Universidad de Sofía. 2003.

田林洋一「瞬間プロトタイプ命題理論」*Sofia Linguistica*, 51. 39-60. 東京. 上智大学. 2003.

Vendler, Z. *Linguistics in Philosophy*. New York. Cornell University Press. 1967.

山田善郎監修「中級スペイン文法」東京. 白水社. 1995.

- 1) Bosque (1980)、Sánchez López (1999) 他を参照。
- 2) 出口 (1995a: 218, 1995b: 551) も主題化の観点から EN 否定を説明している。
- 3) (8) の従属節の極性判断はインフォーマントによって異なるので、曖昧とすべきである。
- 4) 動詞のダイナミクスに関しては Vendler (1967)、影山 (1996) 他を参照。
- 5) Lakoff & Johnson (1980) 及び Lakoff (1987) を参照。
- 6) (10) が示すように、動詞のダイナミクスや telicity によってのみ EN を伴った表現の極性が変化する可能性は否定されるが、動詞の成分分析では pegar ojo のように常に否定辞を伴って出現する動詞を考慮する必要がある。
- 7) プロトタイプ命題の詳しい議論は Tabayashi (2003) を参照。
- 8) (19) の反例と思われるものに以下の例文がある。
  - (i) a. En parte alguna se le puede encontrar.
  - b. En alguna parte se le puede encontrar.(ia) は否定解釈、(ib) は肯定解釈を取るが、これは EN 否定というより parte alguna の否定辞的振る舞いの影響の方が強いと思われる。即ち、(ia) の否定極性は EN 前置詞句が主題化したことで生じたものではなく、N + alguno / a の語彙的特性ないしは統語的特性と考えられる。
- 9) プロソディないしは語用論的要素を考慮に入れると (19) の妥当性が崩れることがあ

る。

(i) *En tu vida has trabajado tanto.*

(i) は (19) に従えば肯定解釈を持つが、音調によって否定解釈を取ることもある。(ii) の大文字の部分は卓立 (プロミネンス) が置かれたことを示す。

(ii) a. *En tu vida has trabajado TANTO.*

b. *En tu VIDA has trabajado tanto.*

(iia) は (19) に従い肯定解釈を持つが、(iib) は EN 前置詞句内の VIDA に卓立を置くことによって否定解釈を持ちうる。原因として、否定極性に直接かかわる要素を強調することにより、tanto の意味的役割が減じている可能性が考えられる。Jackendoff (1972) も参照。

語用論的な知見からは、(iii) 及び (iv) が選択的前置詞句が出現しているにもかかわらず否定解釈を持ちうる。

(iii) *En toda la tarde he vendido un puto / mal libro como ayer.*

(iv) *En tu vida has trabajado tanto como hoy.*

(iii) では、puto / mal が否定極性を誘発する誘因子の解釈が考えられるが、だからといって puto / mal を端的に否定の誘因子と決定することはできない。(iv) は hoy との比較によって否定の解釈が容認されうる。対比的な肯定命題を常に背後に持つものが否定文であるとするならば、(iii) と (iv) は否定文における前提の肯定命題が副詞句 como ayer / hoy によって表現されているために否定と解釈されうる。従って、語用論的要因も EN 否定の分析には無視できない。加賀 (1997: 140) も参照。

10) Lakoff (1987) は、there 構文によってこの重要性を示している。

11) 影山 (1996) はこの区別立てが重要であると論じている。

12) 松本 (2002) では、構文理論は動詞の意味を軽視しているとの主張から、構文知識に対して慎重な姿勢を示している。

13) こうした項の不一致は、事象構造のどの部分を焦点化するかによっても変化する。例えば、*They voted for her* と *They voted her into office* において、前者は一項動詞、後者は二項動詞となる (西村, 2002: 293)。

14) 影山 (2002 : 122) は、(23) を「語彙概念構造における項構造のすりかえ」として説明し、統語構造と語彙概念構造のインターフェイスに項構造があると主張する。影山 (1996 : 133) も参照。

15) 意味構造の表示は Jackendoff (1990) に準拠し、意味分解は BECOME や ACT といった基本的な意味成分に還元されうるのを前提としている。

16) 概念構造における極性 (POL) の位置は中右 (1994) を参照。

17) 本稿では同一指示標識にローマ字を用いたが、Jackendoff (1990: 62) の項束縛 (Argument Binding) と同義である。

18) 3.1 節 (19i) 参照。

- 19) Alarcos Llorach (1980) は、多くのスペイン語の動詞は自動詞的にも他動詞的にも用いられると指摘している。
- 20) Goldberg は、構文文法を「解明できない言語表現のごみ箱的存在」にしないために、ある言語表現に対して何を構文として扱い、また、どこまでを単語の特性とするかに関して五つの意味論的制約を立てている (Goldberg, 1995: 174)。EN 否定は当面この制約をクリアしているものの、それぞれの制約に関しては課題が残されているように思われる。
- 21) Levin & Rapoport (1988: 282) は語彙的従属化 (Lexical Subordination) を使って、ある動詞の基本的意味に新たな述語を従属化させることで構成性の原理を保とうとしている。これは Jespersen (1928: 232-234) を基盤とした伝統的な考え方であるが、生成語彙論と同様、動詞に付加される情報が多すぎるという欠点を持つ。太田 (1980) も有限規則の循環適用という観点からこの姿勢を崩していない。
- 22) 意味役割の定義は大堀 (2002) による。意味役割 location は時間的場所というメタファーに関連して生じたものである。

<Resumen>

## Consideración sobre las condiciones de la negación con EN

Yoichi Tabayashi

En este trabajo intentamos analizar la estructura conceptual de la negación con *EN* según el método de la *Gramática de Construcción* por Goldberg (1995). Definimos la negación con EN como en las expresiones siguientes.

*En* toda la tarde agarró una rata.

*En* tu vida has trabajado, Pedro.

Aunque no aparece la palabra negativa en (1), estas frases indican la negación por el elemento de EN. En este artículo primeramente aclaramos las *condiciones sintácticas* de la negación con EN sin aparecer palabras negativas. En segundo lugar, en la perspectiva semántica, considerando las condiciones sintácticas suponemos las semánticas de la negación con EN. Finalmente formulamos la estructura argumental de la negación con EN y analizamos el prototipo de la negación con EN como sigue.

(2) Composite structure: Negation of EN

Sem	<b>location</b>			< agent <u>+NEG</u> >
R: means,		PRED		
Syn	<b>+Tem LOCi</b>	V	SUBJ	<b>tracei</b>

Como en las futuras investigaciones, estudiaremos la identificación de los casos y el papel semántico de la negación con EN.